

## 祭りの変化と社会状況

——見付天神裸祭における 1960～61 年の変化を事例として——

谷 部 真 吾

### 1. はじめに

本稿では、静岡県磐田市見付地区に伝承されている見付天神裸祭を事例として、祭りの変化について考察する。2000年（平成12）12月に国の重要無形民俗文化財に指定された見付天神裸祭は、1960年（昭和35）に起こった事件を1つの契機として、翌年にその行事構成や日取りを変更することになった。本稿では、1960～61年という日本の高度経済成長期に含まれる時期に起こった裸祭のそうした変化を明らかにしつつ、以下の2点について考えていきたい。それは第1に、地域社会の祭りを通して見た場合、高度経済成長期とはいったいいかなる時代として把握することができるのかであり、第2に、祭りの変化のありようは、どの程度、その当時の社会状況によって決定されるのかである。

ところで、本稿で取り上げる見付天神裸祭の変化は、上述のように1960～61年にかけて起こったものである。この時代の日本は、高度経済成長期の真っ只中であつた。近年、その当時の社会的・文化的状況を扱った研究が目につくようになってきたが、そうした研究を概観してみると、学生運動を事例としたメディア論的な研究や〔北田2005〕、様々な統計資料を用いた社会経済史的な研究が多いように思われる〔武田2008〕。確かに、このような研究は、高度経済成長期の社会的・文化的状況を深く掘り下げて考察しており、きわめて刺激的である。しかし、その一方で、この時期の、とりわけ地方の文化現象に関する実証的な研究は、ほとんど行われていないように思われる。一般に、地域社会に伝承されている文化事象は時代とともに変化すると考えられており、多くの文化事象が戦後、特に高度経済成長期にその様相を大きく変えたともいわれている。しかし、ある地域の祭りや年中行事、とりわけ地方のそれらが、この時期に、いかなる理由で、どのように変化したのかを詳らかにした研究は、文化人類学や民俗学に限らず、宗教学、歴史学、社会学を見渡しても、管見の限りほとんど存在していない。これでは、当時の社会的・文化的状況やその特徴といったものを、十全に把握することは不可能である。こうした学問的状況において、本稿のように高度経済成長期における祭りの変化という、地域社会の具体的な文化現象を扱うことの意義は、決して小さくないものと考えられる。本稿のささやかな試みによって、先行研究の空隙を少しでも埋めることができれば幸いである。

## 2. 1960年当時の見付天神裸祭の概要

本格的な分析に入る前に、1960年までの見付天神裸祭の様子について、簡単に説明したい。この祭りは、磐田市の中央部に鎮座する見付天神の例祭であり<sup>1</sup>、当時は旧暦8月10・11日に行われていた。このころの参加町内は20町内であり、各町内は地理的に4つのグループに分けられ、西から「一番觸」、「二番觸」、「番外」、「三番觸」と呼ばれていた<sup>2</sup>。

見付天神裸祭の行事構成は少々複雑である。先程、この祭りは旧暦8月10・11日に行われていたとしたが、こうした説明は正確ではない。実際には、その約1週間前の8月2日から、裸祭に関連した行事が始まっていたからである〔見付天神裸祭保存会(編)2010〕。この日に行われる行事は「祭事始」と呼ばれる<sup>3</sup>。この行事は2つの儀礼からなる。1つは「元宮天神社祭」であり、もう1つは「御斯葉下ろし」である。元宮天神社祭は、見付天神の旧社地であるとされる元宮天神で行われる神事である。元宮天神は、見付天神から見て北東の方角にある台地の上に鎮座しており、かつてはこの神事の中で、その日の深夜に行われる儀礼、御斯葉下ろしにおいて使用される櫛を採取したといわれている。一方、御斯葉下ろしとは見付天神の境内や見付の町中に櫛を立てていく行事であり、合計15本の櫛を13ヶ所に立てていく(図1)。このとき、表通り(旧東海道)に面した家々の明かりはすべて消されることになっている。そうした御斯葉下ろしという儀礼のもつ意味については、元宮天神から採ってきたとされる櫛に台地上の神、もっといってしまえば山の神を乗せて見付の町の中に迎え入れると同時に、そうした櫛の力によって街道を含む町中すべてを清め、そこを聖なる空間に変えることであるとされている〔磐田市民俗調査団(他編)1984:185〕。おそらく、そのような儀礼の意味と密接に関わるものと思われるが、御斯葉下ろしが終わってから裸祭が終了するまでの間、かつての見付では不浄を極端に忌み嫌い、葬式を出すことが禁じられ、また月経の女性を隔離したという伝承を今も聞くことができる。

次に、大祭3日前の8月7日に行われる「浜垢離」について見てみたい。浜垢離は、遠州灘に面した福田町の海岸で行われる<sup>4</sup>。そこでは、神職をはじめ、裸祭に参加する氏子たちが禊をする(図2)。このとき、荒波に洗われた12個の小石と浜砂、海水が持ち帰られる。小石は大祭当日

<sup>1</sup> 見付天神というのは通称であり、正式な社名は矢奈比売神社である。この神社の祭神は、矢奈比売命と菅原道真である。

<sup>2</sup> 現在では、これら4つのグループを西区、西中区、東中区、東区と称している。また、後に本文でも触れるように、現在の見付天神裸祭は旧暦8月10日直前の土・日に行われており、参加町内も28町内となっている。

<sup>3</sup> 祭事始前日の8月1日には「御煤払」という行事が行われる。御煤払では、宮司が祝詞を奏上した後、拝殿や本殿の清掃がなされる。この行事を、裸祭に関連するその1つとみなすことも確かに可能である。事実、見付天神裸祭保存会によって編集された『見付天神裸祭の記録』では、そのようにとらえている〔見付天神裸祭保存会(編)2010:37, 77, 80〕。ただ、本稿では、8月2日に行われる行事につけられた「祭事始」という名称を重視し、これを裸祭関連行事の最初とすることにした。

<sup>4</sup> 浜垢離へは、1953年(昭和28)まで船を仕立てて見付の町中を流れる今之浦川を下って行っていた。だが、こうした船を使つての浜垢離は、今之浦川の水量が減少したことにより、翌年から中止となってしまった。



図1 御斯葉下ろしで神を立てる場所  
資料提供：磐田市教育委員会文化財課



図2 浜垢離(昭和初期、文進堂発行『見付天神裸祭絵葉書』より)  
資料提供：佐口行正氏

の神輿出御時に神輿の周囲におかれ、また浜砂と海水は大祭前日に行われる御池の清祓の際に使用される。このような浜垢離は、明らかに祭り参加者たちの禊である。それと同時に、上述した御斯葉下ろし同様、このときに持ち帰られる小石、あるいは砂や海水に海の神を乗せて、見付の町の中に招き入れる行事であると解釈することもできよう。

大祭前日（8月9日）の夜には、見付天神の境内にある御池の前で「御池の清祓」と呼ばれる神事が執り行われる。この行事は、神社境内を清めるために行われるといわれており〔磐田市民俗調査団（他編）1984：190〕、実際、浜垢離の際に持ち帰られた浜砂と海水を用いて神社の拝殿や境内を神職が祓って回る。

こうした諸行事を経て、いよいよ大祭当日を迎えることになる。すでに述べたように、大祭は8月10・11日の日程で行われるが、まずは大祭初日（10日）の行事から見てみたい。この日の行事は、主に2つの儀礼からなる。1つはPM9:00ごろから始まる「宵の祭り」であり、もう1つはAM2:00から始まる「夜中の祭り」である。宵の祭りでは、腰蓑姿の男性たちがグループごとに集団を作って、見付の表通りを行き来する「道中練り」が行われる（図3）。各グループはそれぞれの予定にしたがい、南西の端の境松御旅所あたりから東の端の三本松御旅所までの間を練り歩く。その後、裸衆はいったん町内へ戻り、そこでしばらく体を休めてから、再びAM2:00近くになると夜中の祭りのために動き出す。彼らは町内ごとにまとまって見付天神を目指し、神社に到着すると拝殿へと踊りこむ。これを「堂入り」という。堂入り後、彼らは拝殿の中に留まり、次々と入ってくる氏子たちを迎え入れる。彼らは狭い拝殿の中で互いに体をぶつけ合う。これを「鬼踊り」を呼ぶ（図4）。やがて月が沈むと、神輿の渡御となる。神輿は、拝殿の奥から鬼踊りを行っている人々をかき分けるようにして出てくる。その



図3 道中練り（昭和初期、文進堂発行『見付天神裸祭絵葉書』より）  
資料提供：佐口行正氏



図4 鬼踊り（昭和初期、文進堂発行『見付天神裸祭絵葉書』より）  
資料提供：佐口行正氏

後、神輿は御旅所となる淡海国玉神社へと向かう<sup>5</sup>。このとき、氏子の家々の明かりはもちろん、街灯の明かりにいたるまで、町中の明かりという明かりはすべて消されることになっている<sup>6</sup>。神輿は、そうした真っ暗闇の中を淡海国玉神社に向けて疾走する（図5・図6）。神輿が無事御旅所に着くと点灯が許される。と同時に、見付天神裸祭の初日の行事もすべて終了となる。こうした初日の行事において特筆すべきは、やはり道中練りと鬼踊りであろう。この2つの行事の意味については、邪霊を鎮めるために行われる反閤であると考えられている〔吉川1983、野本2000：169、谷部2009〕。

翌11日の大祭2日目には、神輿の還御が行われる。神輿はPM6:00ごろに淡海国玉神社を出発し<sup>7</sup>、境松御旅所や三本松御旅所を経由してから見付天神へと帰る。つまり、氏神である矢奈比売命を乗せた神輿は、表通りのみとはいえ、2日間かけて氏子域を一回りしてから元の神社に戻るのである。なお、神輿の渡御・還御の際は、神輿を上から見下ろしてはいけないとされている。その理由については、「神様の乗った輿を上から見下ろすことは不敬にあたるからだ」と説明される。

以上、1960年までの見付天神裸祭の概要について説明してきたが、こうした行事構成からすると、この祭りにいかなる意味が込められているのかが明らかとなろう。すなわち見付天神裸祭

<sup>5</sup> 淡海国玉神社は遠江国の総社（惣社）であり〔池田（他監）1988：281〕、「総社」または「中の宮」とも別称される。

<sup>6</sup> 1960年10月3日の『中部日本新聞』は、こうした消灯の様子について、「磐田〔警察〕署は、一斉消灯で署内はまっくら、緊急車も出動困難なありさま」だと記している（〔〕内は引用者）。

<sup>7</sup> 還御の出発時間に関しては、氏子組織である見付三社崇敬者が1953年（昭和28）に発行した印刷物、「昭和28年 天神社大祭日程」を参照した〔茂木（編）1991：169〕。



図5 神輿渡御（昭和初期、文進堂発行『見付天神祭絵葉書』より）  
資料提供：佐口行正氏



図6 神輿巡行図  
資料提供：磐田市教育委員会文化財課

とは、山の神と海の神を見付の町中に招き入れつつ、祭りに関わる人々や見付の町中、さらには見付天神の境内を、榊・浜砂・海水や反閘によって何度も何度も祓い清めた上で氏神を巡行させることで、氏子域に祝福を与える祭りなのである [谷部 2009]。

### 3. 見付天神裸祭の変化

こうした裸祭に、1960 年、ある事件が起こったようである。そのことは以下に示す文章からも察することができる。この文章は、磐田市に隣接する静岡県周智郡森町の警察署長が毎年 11 月に行われる森町森地区の祭り、通称「森の祭り」の直前である 1960 年 10 月に、森の祭りの関係者に対して出した文書の中の一節である<sup>8</sup>。そこには次のように書かれている。

お願い

三島神社の例祭に警察の見解を披歴して、各町内会長各位の協力をお願いする。

1. お祭りだから少しぐらいのとの暴力行為は絶対に許されない。飲酒の上、お祭りだから、酔っているからという親心が、暴力を増長せしめるのではないか。若し見付天神社のよ  
うなことがおこれば、郷土のはじになろう (下線は引用者)。

文中の下線部から、この年の見付天神裸祭で何らかの事件が起こったことは明白であるが、文面からして、おそらくそれは「暴力」に関係する事件であったようである。しかも警察は、それを「郷土のはじ」として問題視していた。では、その事件とは、具体的にどのようなものであったのだろうか。それは、1960 年の神輿の渡御・還御の際に起きた。大祭 1 日目の神輿の渡御のとき、消灯の決まりに反して、明かりをつけたままの家が複数あった。このため、祭りの担い手たちがそれらの家々に押し寄せ、表戸のガラスを割ったり、門のかんぬきの鉄棒を折ったりという事件が 3 件起きてしまった。また、翌日の神輿の還御の際、神輿を二階から見ていた家があった。これもまた、祭りの規範に違反していることから、氏子たちがその家に土足で上がりこんでしまうといったことも起きている。このような行為は新聞でも報じられた。記事には、そうした行為に対する一部の市民たちの反応が以下のように記されている。

市民の間でもようやく「数百年前から続く祭りの習慣や神事をそのまま現代の市民に押しつけるようなことは好ましくない。神事は神事として残して良いが、その行事を町中の人々が楽

<sup>8</sup> 森の祭りは、高度経済成長期ごろまで、「暴力行為」や「不法行為」の絶えない荒っぽい祭りであった。森警察署では、そうした森の祭りの「暴力性」・「不法性」を抑制するために何度か印刷物や通達を発していたが、本文に引用した文章も、そうした文書類の 1 つから抜き出したものである。なお、森の祭りの簡単な説明については、拙稿を参照のこと [谷部 2004]。

しい気持で見られる祭りにしたい」という声も一部にあるようだ。

(1960年10月3日『静岡新聞』)

“もっと時代に応じた楽しいまつりに……”という声が、市民の間で高まっている。——(中略)——神社関係者と一般市民の昔のしきたりについての考えはくい違っており、もったきびしく昔のしきたりを守れという神社、年寄りの強い声に対して、現在の生活に応じ、消灯は神社境内か、神体通過の沿道にとどめ、公共的なものは除外し、各家の協力で行なうべきだといった一般市民の意見も強まっている。

(1960年10月3日『中部日本新聞』)

このように、一部の市民たちは、1960年の裸祭で起こった事件に批判的な意見を述べていたが、より強くこの事件を批判したのは警察であった。事件直後、警察は『『祭事にかこつけての暴力は絶対許せない』と捜査に乗り出し』たという(1960年10月2日『中部日本新聞』)。警察のこの主張からも理解できるように、彼らはこの事件を暴力事件として認識していたのであった。また、マス・メディア(新聞)も、以上のような一部の市民たちの声や警察の動きを取り上げることで、今回の事件をどちらかといえば批判的にとらえていたようである。ところで、このように各方面から批判されてしまった1960年の事件は、いったいどのように理解したらよいのであろうか。それは、たまたまこの年に起きてしまった逸脱行為だったのであろうか。それとも、程度の差こそあれ、こうしたことは祭りの際にたびたび行われていたのであろうか。この点を考えていく上で参考になるのが、1960年10月2日の『中部日本新聞』に掲載された次の記事である。

この神体渡御時の消灯はきびしいきまりで、以前は見物人が自動車のライトをつけて乱暴されたり、消灯しない家がこわされた。二階からみこしを見おろしたとおどかされた、などの話もある。

似たような話は、筆者の調査でも関係者から聞くことができた。彼らによると、「かつては消灯時に明かりがないか、探しに行った。窓から漏れる明かり、車のライト、タバコの火、何でもよかった。明かりがあれば、みんなで押し寄せた」、「二階から神輿を見下ろしている人がいれば下に降りるよう、みんなで怒鳴った。それでも神輿を見続けていると、大騒ぎになった」という。こうしたことからすると、1960年の裸祭の際に見られた荒々しい行為は、たまたまその年に起こってしまった偶発的な事故の類ではなく、それまでもたびたび祭りの中で見られたようである。しかも、そうした行為はおそらく、祭りの規範に違反した者に対する制裁として認識されていたものと推察される。しかし、1960年の祭りにおいて、そういった行為は昔の習慣やしきたりを現代の市民に押しつける理不尽なふるまいであり、不当な暴力の行使であるとして一部の市



民のみならず、警察やマス・メディアからも批判されてしまったのである。このことは、祭りのありように対する認識に、この時期、変化があったことを意味している<sup>9</sup>。

いずれにせよ、見付の人々によれば、1960年の出来事が警察やマス・メディアによって批判されたこともあって、裸祭は翌年からそのありようを大きく変えることになったという。具体的には、それまで宵の祭りと夜中の祭りという2部構成だった行事を1つにまとめ、道中練りの直後に堂入りを行い、それに続いて鬼踊り・神輿の渡御を行うようになった。また、祭りの日取りも変更し、それまでの旧暦8月10・11日から、8月10日直前の土・日に実施するように改めたのである。こうして見付天神裸祭は、1961年以降、以上のような形で祭りをを行うようになり、現在までのところ大きな事故もなく続けられている。

#### 4. 祭りと高度経済成長期

ここまで、見付天神裸祭の高度経済成長期における変化の経緯について見てきた。その結果、この時代に裸祭の中で見られた荒々しい行為が、不当な暴力であるとして批判されたことが明らかとなった。だが、よくよく調べてみると、こうした現象は何もこの祭り特有のものではなく、他の祭りでも見ることができる。例えば1960年10月22日の『静岡新聞』には、静岡県原町（現在の沼津市）の八幡神社の秋祭りにおいて、暴力事件が発生したという記事が掲載されている。それによると、この年の祭りで若者同士のけんかや、通行人さらには警察官への暴力が見られたようである。さらに記事では、そうした暴力行為を、地域の有力者たちが「まつりの出来事だから」として穏便に済まそうとしていることまで報じ、このような一連の出来事を批判している。八幡神社の秋祭りに対するこうした『静岡新聞』の論調は、先にあげた森町の警察署長によって出された文書を思い起こさせる。森町の署長は、「お祭りだから少しぐらいのとの暴力行為は絶対に許されない。飲酒の上、お祭りだから、酔っているからという親心が、暴力を増長せしめるのではないかと述べていたが、警察署長もマス・メディアも、祭りの中で発現した逸脱行為を非日常的な時空で見られた特殊なふるまいとして大目に見ることはもはや許されず、それがたとえ祭りの最中に起こった出来事であったとしても、日常的な法規に照らして暴力と認定されれば、

<sup>9</sup> しかし、祭りの規範に違反した者に対する制裁としての荒々しい行為は、1960年よりも前に一部の関係者たちによって不当な暴力として認識されていた可能性がある。例えば、1960年10月2日の『中部日本新聞』には、祭りの前に関係者間で「絶対に暴力を使わぬよう」申し合わせをしていたと報じられている。「絶対に暴力を使わぬよう」という表現からすると、人への暴力はもちろん、今回のような物への暴力も禁止しようとしていたと考えることができる。また、こうした報道からすると、一部の関係者たちの中には、「制裁としての荒々しい行為は暴力であり、よくないことである」という認識があったと思われる。もし、荒々しい行為を違反者に対する制裁として当然視していたのであれば、祭りの前にこのような申し合わせをする必要はなかったと考えられるからである。とはいえ、そうした認識がありながら1960年のような事件が発生してしまったことを考慮すると、この種の認識はあくまで一部の関係者たちの間で共有されていたに過ぎず、一般の裸祭参加者までは浸透していなかったと解釈するべきであろう。

あくまでそれは暴力であるという見解を示している。

また、山車と山車とをぶつけあう、勇壮な祭りとして知られる富山県高岡市の伏木曳山祭（通称「勇み山」あるいは「けんか山」）では、かつて祭りの最中にたびたび怪我人が出たことを問題視した警察によって取り締まりが強化されたこともあり、昭和30～40年代ごろから、より穏やかな祭りへと変化していった〔直1968：40-47、富山大学人文学部文化人類学研究室1988〕。さらに、東京都府中市の大国魂神社例大祭（通称「くらやみ祭」）でも、昭和30～40年代にかけて暴力事件が絶えなかったという。そのため、PTAや議会、さらには警察からの圧力を受け、それまでPM11:00にすべての明かりを消した状態で行っていた神輿の渡御を、1968年（昭和43）に昼間に移行した。さらに、1969年には大祭本部を組織するなどして、騒乱防止・事故防止を図ったりもした〔松平1990：234-239〕。似たようなことは、すでに述べた静岡県周智郡森町の森の祭りでも起こっている。遠州地方で「森のけんか祭り」として知られていた森の祭りは、戦後になると警察や学校、さらにはマス・メディアなどから、暴力的で不法な祭りとして位置づけられてしまった。そうした中、1973年（昭和48）に、不幸にして2件の死亡事故が発生してしまったこともあり、警察やマス・メディアからの圧力が一層厳しくなり、翌年にけんか祭りとしてのありようを改めざるをえなくなったのであった<sup>10</sup>。

これら4つの祭りの事例は、それまでとりたてて問題視されることなく行われていた祭りの中のある種の行為や出来事が、昭和30～40年代という日本のほぼ高度経済成長期にあたるころに、「暴力的である」として批判され始めたことを示している<sup>11</sup>。こうした、祭りの暴力性を批判する声は、おそらく以前から存在していたのであろう。しかし、かつては、そうした声が地域社会の中で大勢を占めるようになることは、ほとんどなかったものと思われる。その理由については、例えば松尾恒一の指摘が参考になる。松尾によると、もともと祭り、とりわけ都市部で行われる祭りの場合、乱闘や刀傷沙汰は古代以来の通時的な現象であったという〔松尾2009：183-193〕。さらに彼は、弘前や黒石のねぶたを事例として取り上げ、これらの祭りでは近世から昭和前期までの間に、大きなけんかが何度か行われていたことを明らかにしている。その際には、木刀や竹やり、礮、さらには職人の作った花火までもが武器として使われたと指摘している。あるいはまた祭りの中で発現する暴力の、すべてとはいわないまでもある一部について、具体的には神輿が氏子の家を破壊したり破損したりした場合などは、それを神の意思もしくは共同体の意思として考えることもできるという解釈さえある〔ハーン1976：87-89、柳田1990：550-551〕。

<sup>10</sup> 森の祭りのこうした変化については、別稿で詳細に検討するつもりである。

<sup>11</sup> 「暴力的である」として批判されたこれら4つの祭りとはやや性質が異なるものの、高度経済成長期にそれまで当然と思われてきた祭りの中の行為が批判の対象となった例は他にもある。例えば、1961年7月12日の『静岡新聞』に記事として掲載された、吉原市（現在の沼津市）の一部集落における祇園祭・天王祭がそうである。記事によると、これらの祭りでは、子どもたちによって祭りの祝儀が集められ、その祝儀は彼ら自身によって分配されることになっていたという。新聞では、子どもたち自身の手による祝儀の収集・分配を、「悪習」もしくは「はずかしい習慣」として批判的に論じている。

このような指摘や解釈からすると、かつては祭りの中で暴力が発現することを、ある意味で「当然のこと」としてとらえていたのではないかと思われる<sup>12</sup>。ところが高度経済成長期ごろになると、祭りの中のある行為や出来事を「暴力的である」として批判する声が急に大きくなり、それがために上で列挙したような一部の祭りでは、そのありようを変化させざるをえなくなったのである。こうした点からすると、高度経済成長期とは、祭りの中に「不当な暴力」が潜んでいることを人々が認識し始め、そうした行為・出来事を強く批判しただけでなく、場合によってはその改変を迫る時代であったといえるのではないだろうか<sup>13</sup>。

## 5. 見付天神裸祭の変化の理由をめぐって

### 5-1. 1961年の変化における暴力抑制効果について

高度経済成長期という時代をそのようなものとして捉えるべきか否かについては、さらに詳細な検討が必要となる。本稿では、そこまで立ち入って考察することができないため、ひとまずここでは、高度経済成長期とは祭りの暴力性を批判し、その改変を迫る時代であった可能性があるという指摘するのみに留めたい。その上で、改めて見付天神裸祭の1961年における変化を眺めてみると、少し気になることがある。すでに示したように、このときの裸祭の変化は大きく2つに分けることができた。1つは、それまで2部構成であった祭りを1つにまとめて行うようにしたことであり、もう1つは、祭りの日取りを土・日に移したことであった。そうした変化が生じた理由の1つとして、見付の人々は、前年に発生した出来事が警察やマス・メディアによって批判されたためであったと考えている。だが、裸祭に見られた2つの変化が、前年に発生してしまったような荒々しい行為を抑制することに、本当に効果を発揮したのであるだろうか。真に祭りの暴力性を抑制したいのであれば、もう少し効果的な方法があったのではないだろうか。例えば、「祭りの規範に違反した者に対する制裁は、度が過ぎると不当な暴力になる」という認識を担い手に徹底的に植えつけることで彼らの意識改革を行ったり、祭り全体を統括する強い権限をもった組織を編成することで暴力が再発しないよう管理・監視体制を強化したりするという手段もあったはずである<sup>14</sup>。にもかかわらず、なぜ裸祭の関係者たちは、認識の徹底や管理・監視体制の強化では

<sup>12</sup> 祭りの中でたびたび暴力行為が見られたことについては、何も日本の祭りに限った現象ではない。西欧でも、特に中世において、そのような行為が見られたことをイヴ＝マリ・ベルセも報告している [ベルセ1992]。ベルセによると、祭りの暴力性は、西欧の場合、近代化の過程で徐々に影を潜めていったという。

<sup>13</sup> このような見解からすると、本文で引用した弘前や黒石のねぶたの事例は、昭和前期に大きなけんかが終わっていたとする点で、きわめて早い時期に祭りの暴力性に人々が気づき、しかもそれを制御することに成功したということができよう。なぜ、弘前・黒石でそのようなことが可能となったのかについては、今後検討してみたいと考えている。

<sup>14</sup> もちろん1961年以降、見付天神裸祭で大きな暴力事件は発生していないという点を重視すると、このときの変化が暴力の抑制に効果を発揮したはずだといえなくもない。しかし、理論的に考えると、行事構成と日取りを変えただけで、なぜ暴力を抑制することができたのか理解に苦しむ。一方で、暴力の抑制に効果

なく、行事構成と祭りの日取りを変えることにしたのであろうか<sup>15</sup>。

だが、今となっては、その理由を明らかにすることは容易ではない。なぜならば、1960～61年にかけて議論された裸祭の変更案について、その成立過程を詳しく知っている人は、すでにいないとされているからである。そのため聞き取り調査はほぼ不可能であり、また当時の詳細な記録も残されていない。とはいえ、今回の変化がなぜこのような形になったのかをおぼろげに示してくれる資料ならば、ないこともない。それは「祭典改正への意見その他について」と題された文字テキストである。この資料は、当時、見付天神の崇敬会役員をしていた石川博敏によってまとめられた文書であり、1961年8月12日に開かれた座談会でのやり取りを活字化したものである<sup>16</sup>。内容から察するに、座談会自体は、すでに示した変更案、すなわち行事構成と祭りの日取りを変化させるという案が8月8日に提示されたことを受けて、開催されたようである。但し、この座談会記録には、出席者の人数や名前等の基本的なデータが記されていないため、それぞれの発言がどういった人物によってなされたのかわからない。その意味で、記録として不備があることは否めないが、それでも裸祭の変容を知る上で貴重な資料であることに変わりはない。

## 5-2. 変化の理由

そこで、この座談会記録を紐解いて見ると、興味深い意見が述べられていたことがわかる。それは例えば、「改正の必要性というか、それが一番問題と思います」という意見や〔茂木（編）1991：240〕、「一番問題になるのはなぜ、改正しなければならぬかということで、これをよくみきわめておかんと、折角の案が出ても検討がうまくいかんと困る」といったものである〔同：242〕。これらの意見からすると、「何のために祭りを変えるのか」が疑問視されていたことがわかる。しかし、そうした問いに対する明確な答えは示されていない。こうしたことからすると、当時、祭りを変化させることの必然性が関係者たちに周知されていなかった可能性があるといえる。おそらく、だからこそ座談会出席者たちは祭りを変更する理由について、次のような推測を行わざるをえなかったのであろう。

---

を發揮したのは、これらの変化そのものではなく、むしろ警察やマス・メディアによってそれまでの祭りのありようが批判されたからこそ、担い手たちの間に「祭りの規範に違反した者に対する制裁は不当な暴力であり、やってはいけないことである」という新たな認識が生まれたのではないかという解釈も成り立つように思われる。つまりこの場合、繰り返しを恐れずにいえば、祭りの変化によって暴力が抑制されたわけではなく、警察やマス・メディアの批判によって、それがなされたという点に留意する必要がある。

<sup>15</sup> 一説には、警察からの強い圧力によって、このように祭りを変えることになったともいわれている。しかし、この直後に本文でも述べるように、当時の詳しい状況についての語りや文字資料が存在していないため、警察からどのような圧力があつたのか、さらには本当にそうした圧力があつたのか、現在のところまったく確認できていない。

<sup>16</sup> この文書は、茂木栄によって編集された『見付天神裸まつり』の中に収録されている〔茂木（編）1991：240-250〕。

〔裸祭を〕改正するには改正する理由があるんですが、改正する理由がもし、昨年度起つた例の暴力事件に関係あるとしたら、もつと外の改正の方法があるのではないかと思います。それ以外に例えば経済的な問題とか、参加者が少なくなつたということであれば、別な方法で改正ができるようなことがあるのではないかと思います [同：240、〔 〕内および下線は引用者]。

改正の必要性というか、それが一番問題と思います。現在は暴力、不祥事件もあるだろうと思うが、大体想像するに参詣者が減ってくるということで、当事者は心配していると思います [同、下線は引用者]。

このような発言からすると、出席者たちの考える裸祭を変更することの理由は、暴力事件への対処、経済的問題、参加者つまり担い手減少への対処、参詣者減少への対処、の4つである。これらのうち、暴力事件への対処については改めて触れるまでもないであろう。しかし、経済的問題、担い手減少への対処、参詣者減少への対処に関しては唐突に出てきた指摘であるだけに、もう少し詳しく内容を確認しておく必要があるように思われる。そこで、まずは経済的問題について見ていきたい。だが、この経済的問題に関しては、引用文として示した意見の中で1度言及されたのみで、これ以降座談会の中で話題に上ることは皆無であった。しかも、ここでの指摘も明確な論拠が示されていないため、熟慮した上での発言とみなすことも難しい。したがって、本稿ではこの「経済的な問題」という指摘については、座談会における議論の流れの中で軽く述べられた程度の意見と解し、これ以上深くその内容を探る必要はないものとする。

次に、担い手減少への対処についてであるが、これについても座談会の中で体系的に論じられたわけではない。しかし、担い手が少なくなってきたことについては、議論の中でたびたび触れられている。例えば、「<sup>(ママ)</sup>年々参会者が減っているんですね。ちょつとインテリぶつてくると祭りに出るのははずかしいということで、減ってきておりますね」という意見や [茂木(編)1991：245]、「興が非常に重い、かつぐ人がないというような問題」[同：247]、「夜中の<sup>(ミシバオロシ)</sup>ミシバオロシに参加する人も少ないですね」[同：248]といった意見などが、それにあたる。こうした主張からすると、座談会出席者たちがこの問題をきわめて重視していたことが理解できよう。

最後に参詣者減少への対処について見ていきたい。そこでまず注目したいのは、「参詣者」という言葉である。いったい、参詣者とはどういう人のことを指しているのであろうか。この点については、先に引用した「参詣者が減ってくる」という指摘の後に述べられた一連の発言が示唆してくれる。やや長くなるが、関係箇所を引用したい。

現在は暴力、不祥事件もあるだろうと思うが、大体想像するに参詣者が減ってくるということで、当事者は心配していると思います。私は逆に云つて、見ている人が一人もなくても良

いから何百年の伝統をこゝだけで残していくということも、非常に考え方がおかしいと思う。何百年の伝統をこゝの町ではやつているというような、センチメンタルの考えかもしれないが、伝統というか、伝承というか、民俗学的の問題については多いと思います。山の中に残された文化的なことについては、みんなが何万とついてくるのではないかと思う。人がこないから育たないということはないと思う。できれば保存しておくことの方が良いと思う[同：240-241]。

「非常に考え方がおかしい」という表現は、前後のつながりからすると、やや奇妙な印象を受ける<sup>17</sup>。しかし発言全体を眺めてみると、ここでは、たとえ人が来なくてもこれまでと同じような形の祭りを維持・実施すべきであるという意見が述べられている点からして、参詣者が祭りを見に来る人、すなわち見物人のことを指しているであろうことは、おおよそ察しがつく。見物人のことについては、座談会の中で、たびたび触れられている。例えば、「最近は何か非常に派手になつてきたというか、最近は何かからいけないということになつてきた」という指摘や[同：242]、以下のような意見も見られる。これも少々長くなるが、関係箇所を引用する。

今度の改正があると逆に減ることがあるではないかということもあるんですね。というのは時間的に見て、見付に出てくるのは八時から九時頃が多くてゾロゾロ出てくる。おこもりしてくるのが朝一番のバス、汽車であるが、十一時から十二時になるとどうしても泊まらなければならぬ、もつと、早く帰らなければならぬということでかえつて、そのために人が止まらぬという逆効果もあると思う[同：244]。

この発言では、裸祭の行事構成を変えてしまうと、かえつて見物人が少なくなるのではないかという懸念が述べられている。見物人が見付にやってくる時間帯はPM8:00～9:00であり、これまでのように夜通し祭りをやっているのであれば、彼らも朝一番のバスや汽車で帰ればよい。しかし、PM11:00か12:00ごろに祭りが終わってしまうと、その時間から帰ることは不可能であるから、もっと早い時間に彼らは帰らなくてはならなくなる。そうなると、鬼踊りや神輿の渡御のような遅い時間帯に行われる行事のときに、見物人がいなくなってしまうのではないか。この発言では、そうしたことが憂慮されているのである。

このような参詣者・見物人に関するいくつかの発言からは、見付天神裸祭の変化について、次のようなことを読み取ることができる。それは第1に、どうやら見付の人々が、裸祭を見に来る人の数の減少を気にしているらしいこと、第2に、座談会出席者たちは、そうした見付の人々の

<sup>17</sup>「おかしい」という言葉は、「面白い」ないしは「興味深い」の意味で用いられたと考えると、前後の文脈とうまくつながるように思われる。

見解に疑問を感じているらしいことの2点である<sup>18</sup>。このようなことからすると、見物人をめぐり問題については、座談会出席者だけでなく見付の人たちも強い関心を示していたと理解してよいように思われる。

とするならば、出席者たちが推測した見付天神裸祭の変更理由は3つあり、それは第1に、前年に発生した暴力事件に対処するためであり、第2に担い手（参加者）の減少に対処するため、第3に見物人の減少に対処するためであったと考えることができる。このように、さすがに彼らも、今回の変更案の提示が前年に発生した暴力事件と関係があるのかもしれないということは、認識していたようである。しかし、ここで看過できない点は、彼らが担い手の減少や見物人の減少についても指摘していたことである。なぜならば、担い手と見物人の減少に対処するために祭りを変化させたという説明は、1961年における裸祭の変化のありようを見事に合致するように思われるからである。事実、それまで2部構成であった行事を1つに統合することは、祭りの終了時間を早くすることであり、そうすることはまた、担い手や見物人の負担を軽減することにつながるため、結果的に双方の増加を期待することができる。さらに祭りの土・日開催は、週休2日制が一般化するはるか以前であったとはいえ、仕事への影響を少なくすることから、担い手の確保を容易にするとともに、見物人の増加さえも期待できるようになると考えられる。したがって、このように解釈すると、1961年における見付天神裸祭の変化がなぜあのような形となったのか、すんなりと理解できてしまう。もっとも、担い手と見物人の減少に歯止めをかけることが、今回のような変更案を策定したことの最大の理由であると断言するだけの決定的な証拠は、今のところ存在していない。しかし今回の変化のありようを考慮すると、このような変更案を採用した背景には、警察やマス・メディアによる批判に対処するためだけでなく、担い手や見物人の減少にも対処したかったという地域社会の事情を見て取ることもできるように思われる。

## 6. まとめにかえて

以上、本稿では、1960～61年にかけて起こった見付天神裸祭の変化について述べてきた。1960年の裸祭では、神輿の渡御の際に明かりを消さなかったり、還御の際に神輿を二階から見下ろしていたりした家々に、荒々しい行為が向けられた。こうした行為は、かつて、祭りの規範に違反した者に対する制裁として認識されていたものと思われる。それが、この年、警察やマス・メディアによってそうした行為は不当な暴力であるとして批判されてしまった。またこの当時、地域社会の中には、裸祭の担い手や見物人の減少を問題視する人々もいたようである。裸祭の関係者たちは、こうした警察やマス・メディアからの批判や地域社会内部に存在していた問題

<sup>18</sup> このことは、座談会出席者と「一般の見付の人々」との間に、認識の違いがあったことを意味している。それはまた、先に引用した1960年10月3日の『中部日本新聞』の記事にあった「神社関係者と一般市民の昔のしきたりについての考えはくい違っており」という一節を想起させる。

意識に配慮して、1961年にこの祭りを変化させたのである。ここでは、このような見付天神裸祭の変化のもつ意味について改めて考えていくことで、本稿のまとめとしたい。

まず、かつて違反者に対する制裁とされていたであろう行為が、市民への暴力と認識されてしまった点に注目すると、祭りという非日常的な時空では祭り特有の秩序が適応されると一般には考えられているが、日本が高度経済成長期の真っ只中にあった1960年代初頭にはこうした観念がすでに薄らいでおり、場合によっては非日常的な時空であろうとも日常的な秩序が優先されるようになっていたことを、この事例は示しているといえよう。したがって、そのような秩序観の下では、たとえ祭りの規範に違反していた人がいたとしても、その人の身体に危害を加えることはいうに及ばず、所有物を破損することでさえ、明らかに過剰な反応であり、不当な暴力の行使であると認識されることになるのである。このことは、つまり、1960年代の初頭に祭りの秩序観に変化が見られたことを示しており、それはまた、非日常性が希薄化していたことをも意味している。

しかも、そうした状況は、見付天神裸祭に限ったことではなかった。やや時間幅が広がるが、昭和30～40年代にかけて似たようなことは、上述したように高岡市の伏木曳山祭や府中市の大国魂神社例大祭、さらには静岡県原町の八幡神社秋祭り、同県森町の森の祭りなどでも見られた。これらの祭りでは、それまでとりたてて問題視されることのなかった祭りの中の荒っぽい行為・出来事が、この時期に暴力的であるとして批判されてしまったのである。こうした点からすると、非日常性の希薄化という現象は、全国規模で進展していた可能性があると考えられ、そのことはさらに、たとえ祭りという非日常的な時空において発現した逸脱行為であっても、暴力はあくまで暴力であり、決して許されるものではないという認識が広まっていた可能性をも示している。このような見解をもう一步踏み込んで述べるとすれば、この時代、すなわち高度経済成長期とは、祭りの暴力性を批判し、場合によってはその改変を迫る時代であったのではないかと示唆することもできるように思われる。

また、すでに何度も指摘してきたように、本稿の事例において「祭りの規範に違反した者に対する制裁は不当な暴力である」という主張を公にしたのは、警察やマス・メディアであった。見付天神裸祭の1961年の変化は、そうした警察やマス・メディアによる批判を1つの契機として起こったと見付の人々は考えているが、確かにそのような側面は否定できない。とはいえ、そうした変化は、警察やマス・メディアの力のみによって引き起こされたと考えべきではない。そもそも、彼らが「制裁は不当な暴力である」という主張を声高に叫ぶことができたのは、その主張が当時の社会一般に広まっていた認識と合致していたからであろう。その意味からすると、警察やマス・メディアの主張は当時の社会状況によって支持・正当化されていたと考えることができ、そのことはまた、今回の裸祭の変化が当時の社会状況からくる圧力によって引き起こされたということも可能にする。しかし、だからといってそうした圧力が、裸祭の変化のありようを完全に方向づけたわけでもなかった。本稿で見えてきたように、裸祭の変化に際しては、警察やマ



ス・メディアによる批判と直接関係しそうにない地域社会の事情も考慮されていたように思われるからである<sup>19</sup>。もっとも、祭りが地域社会に暮らす人々によって、ある程度主導される社会的・文化的実践であることを考えるならば、祭りの変化の際に彼らの事情が反映されるのも当然といえる。

だが、問題は、そうした彼らの事情が祭りを変化させる際に、どういった理由で、どの程度、誰によって、もしくはどのようにして、持ち込まれたのかである。祭りの変化とは、現行の祭りのやり方「A」を否定・中止して、新たなやり方「B」を導入することである。しかし、「A」の否定・中止は即座に「B」を導くわけではない。「A」の否定・中止は「 $\bar{A}$ 」であるから、次に導入される新たなやり方は、本来「C」でも「D」でも「E」でもよかったはずである。それが、なぜ「B」に一本化されたのか。そのいきさつに注目すると、地域に暮らす人々の認識や価値観、彼らの社会に存在する権威・権力の構造、さらには葛藤なども含めた多様な社会関係を浮き彫りにすることができるのではないかと考える。祭りを、地域社会の現状や構造を理解するための1つの手段として捉えるのであれば、以上のような観点到に注目することの重要性をいまさら強調する必要もないであろう<sup>20</sup>。また、祭りの変化がある方向に一本化されていく様子に注意を払うということは、関係者たちの相互作用に注目することを意味しており、そのことはさらに、祭りの変化をプロセスとして理解することを意味している〔谷部 2006〕。祭りの変化は、方程式の解のように、一定の手続きにしたがえば自動的にあるべき姿が導き出されるものではない。それらは、関係者たちの複雑なやり取りの結果として成立するものなのである。したがって、祭りの変化を考えるという作業は、そうしたやり取りを丁寧に分析していくことに他ならないと考える。

<sup>19</sup> 前章でも指摘したように、ここでいう「地域社会の事情」とは、担い手と見物人の減少に歯止めをかけることであった。このような「事情」は、完全に地域社会内部のメカニズムによって生み出されたわけではなく、地域社会とよりマクロな社会環境との関係性の中で顕在化してきたものであると思われる。その意味では、この「地域社会の事情」でさえ、当時の社会状況によってもたらされたということもできてしまう。しかし、本稿では、当時の資料を分析した結果、このころの社会状況・社会的圧力がより直接的に裸祭に求めていたことは、担い手と見物人の減少に歯止めをかけることではなかったこと、その反面、こうした対策を求めていたのは地域社会であったと考えられることなどから、あえてこららを「地域社会の事情」として捉えることにした。

<sup>20</sup> 米山俊直は、祭りを調査・研究することの意義について、次のように述べている。

祭礼の調査、ことに参加観察と聞き取りによる研究が、都市の現状と性格をとらえ、本質を解明するために有効である。——（中略）——〔祭礼について〕注意深く観察をするならば、その社会のもっている人間関係や集団の構造を理解し、人々の意識を知ることができ、さらにそこに内在する葛藤や緊張関係なども発見することが可能になるであろう〔米山 1986：17、〔〕は引用者〕。

ここで米山は、都市を理解するために、祭りの調査・研究が有効であるとしている。しかし、米山の主張は、何も都市だけにあてはまることではない。都市以外の祭りを対象としても、これらのことを明らかにすることができるからである。とすれば、都鄙のいかに問わず、地域社会の状況をしっかりと把握するために、さらには複雑な近現代社会の諸問題について深く掘り下げて考えていくために、祭りを調査・研究することがどれほど有用であるか、容易に理解されよう。

もっとも、こうした指摘からすると、本来、本稿においても変化のプロセスを詳細に論じ、そこから浮かび上がる見付に暮らす人々の認識や価値観、権威・権力の構造、さらには多様な社会関係等を明らかにすべきであった。しかし、残念ながら、1961年の見付天神裸祭の変化に関しては、資料不足と筆者の力量不足のため、そこまで明らかにすることができなかった。この点については、次回以降の課題としたい。上述のように、高度経済成長期にそのありようを変えた祭りは、見付天神裸祭の他にも複数存在していた。今後は、より詳細にそれぞれの祭りの変容過程を検討することで、地域の人々のありようを明らかにし、その上でさらに、高度経済成長期とは祭りにとっていかなる時代であったのか、また、そのときの変化に際し、地域社会の事情と当時の社会状況との関係はどのように考えられていたのかなどといった問題についても、注意深く考察していくつもりである。

### (謝辞および付記)

本稿を執筆するにあたり、調査にご協力いただいた多くの方々に、心から御礼申し上げます。また、本稿は、平成20～22年度文部科学省科学研究費補助金(C)「道の宗教性と文化的景観」(研究代表者：鈴木正崇教授)、ならび平成23年度文部科学省科学研究費補助金(C)「祭礼における『暴力』の発生と解決をめぐる民俗学的研究」(研究代表者：阿南透教授)による成果の一部でもある。

### 参考文献

- 池田不二男(他監)1988『見付町誌(現代語訳)』遠州文化センター  
 磐田市民俗調査団(他編)1984『磐田の民俗』  
 北田暁大2005『嘆う日本のナショナリズム』NHKブックス  
 武田晴人2008『高度成長』岩波新書  
 富山大学人文学部文化人類学研究室1988『伏木の曳山』  
 直為範1968『伏木の山車』伏木文化会  
 野本寛一2000「矢奈比売神社」谷川健一(編)『日本の神々』10 東海 白水社 pp.164-176  
 ハーン, L. 1976『神国日本』柏倉俊三(訳注)平凡社東洋文庫  
 ベルセ, Y-M. 1992『祭りと反乱』井上幸治(監訳)藤原書店  
 松尾恒一2009「祭り」と表象」古家信平(他編)『日本の民俗9 祭りの快楽』  
 吉川弘文館 pp.163-261  
 松平誠1990『都市祝祭の社会学』有斐閣  
 見付天神裸祭保存会(編)2010『見付天神裸祭の記録』  
 茂木栄(編)1991『見付天神裸まつり』國學院大學日本文化研究所  
 柳田國男1990「祭礼と世間」『柳田國男全集』13 ちくま文庫 pp.543-586  
 谷部真吾2004『森の祭りの現在 ——参加町内・運営組織・行事を中心に——』  
 ——2006「祭りの変化と社会環境の変動」『次世代人文社会研究』第2号  
 pp.349-362  
 ——2009「所作と伝承」『HERSETEC』Vol.3 No.2 pp.13-32

- 吉川祐子 1983 「矢奈比売神社の信仰と芸能」『静岡県民俗学会誌』6 pp.1-19  
米山俊直 1986 『都市と祭りの人類学』河出書房新社

**Abstract**

Ritual Change and Social Conditions:  
A Case Study of the Changing Process of Mitsuke-Tenjin-Hadaka-Matsuri in 1960-61

YABE, Shingo

In Iwata City, Shizuoka Pref., the ritual named Mitsuke-Tenjin-Hadaka-Matsuri is held every summer. In 1961, this ritual changed the constitution and date of it owing to an incident which happened during this ritual last year. In this article, using the changing process of this ritual which occurred between 1960 and 61 in Japanese high economic growth period as an example, I consider what was the feature of this period, and how much the social conditions in those days affected the changing process of Mitsuke-Tenjin-Hadaka-Matsuri.

Recently, there is an increase in the studies of social or cultural phenomenon in Japanese high economic growth period. But there are little studies to explain the changing process which occurred in local ritual/festival or annual event at this period. From this aspect, it is next to impossible to understand the full extent of social or cultural conditions and feature in that era. Under this academic context, I think this article dealing with the changing process in local ritual has great significance.